

—実践報告—

基礎看護学実習における実習前のバイタルサインズ測定の授業効果の検討

曾我 浩美, 中西 京子, 松井 晴香, 足立 みゆき
 滋賀医科大学医学部看護学科基礎看護学講座

要旨

基礎看護学実習前のバイタルサインズ測定の授業において、「事例患者を想定したバイタルサインズ測定を含む一連の看護援助」と設定した演習を行った。その学習や経験が実習でどのような効果をもたらしたのかを明らかにすることを目的とし、看護学生へのアンケート調査を行い、質的記述的方法で分析を行った。その結果、学生は基礎的な知識、確実な測定技術、冷静に実施できる精神力が実習で役に立ったと評価し、測定時の患者とのコミュニケーションに対する準備も役に立ったと感じていた。また、測定技術単独の練習だけでなく、事例患者を用いて個別性を踏まえた看護援助を経験しておくこと、看護援助としての一連の流れをイメージ化しておくことが効果的であったと感じていた。一方で学生は、学内演習環境と臨地実習の物理的環境の差異、患者の加齢による身体的変化が測定に及ぼす影響、患者個々に合わせた臨機応変な対応に困難を感じていた。また、実践を通して自己の知識・技術の未熟さを実感していた。

キーワード：看護教育、基礎看護学実習、看護学生、バイタルサインズ測定

はじめに

近年、看護系大学の急激な増加に伴い、学習環境の変化や看護学生の多様化がみられ、看護学基礎カリキュラムや臨地実習の見直しが必要とされるようになった。こうした中、平成23年3月の「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」による報告では、看護学教育の質を保証し、看護実践能力を修得するための各大学における取り組みとして、学生の状況に合わせた効果的なカリキュラムや教授方法を開発・実施することが提言されるとともに、学士課程においてコアとなる看護実践能力と到達目標が明示された¹⁾。

このような背景のもと、本学における基礎看護学実習Ⅱでは、初めて病棟という環境において患者を受け持ち、患者との関係性を構築しながら看護過程を展開し、看護ケアを実施している。しかし、例年多くの学生が初めての臨地実習に対する不安や緊張、ストレスを感じているのが現状である。中でも初めてバイタルサインズ測定（以下、VS測定と示す）を行うにあたり、一連の看護援助としてどのように実施したら良いかが想像できず、困惑する学生が多くみられた。

そこで本研究では、今年度新たに試みたVS測定の授業による学生の学びと課題を見出すとともに、その学習や経験が、実習において学生にどのような効果をもたらしたのかを明らかにすることを目的とした。

研究方法

1. 授業および実習の概要

1) VS測定の授業

看護技術論Ⅲ（第2学年前期・2単位）において、VS測定の技術の習得を学習目標とし、平成26年4月

に行った。演習では、看護過程論Ⅰ・Ⅱ（第1学年後期～第2学年前期・各1単位）で看護過程を展開している事例患者を対象と想定し、患者の個別性を踏まえた上で、VS測定を行う際の一連の看護援助の方法・留意点の検討および実践練習を行った。事例患者は、79歳の女性、右橈骨遠位端骨折の治療目的で入院しており、右前腕部のギプス固定中であること、発熱・全身倦怠感を認めることから日常生活援助を要している患者とした。

平成26年6月には「VS測定の確認」として、練習した看護援助を制限時間内に個別に実施し、教員が評価・フィードバックを行った。全学生の技術到達度が合格基準を満たすまで繰り返し確認を行った。

2) 基礎看護学実習Ⅱ（第2学年・2単位）

平成26年9月の2週間でを行った。初めて患者を受け持ち、一連の看護過程を展開するとともに、患者に必要な日常生活援助技術等を実施した。VS測定に関しては、①実習指導者または看護師による測定の見学、②実習指導者または教員の見守りのもと実施、③実習指導者または教員の許可のもと自立して実施、の過程を経ることを原則とし、全学生が自立して実施できるようになることを目標とした。

2. 対象者

VS測定の授業と基礎看護学実習Ⅱを履修した57名の看護学生とした。

3. 研究期間

平成26年6月～平成26年10月であった。

4. 調査方法

対象者にVS測定の授業終了後（実習前）と実習終了後の計2回、アンケート調査を行った。授業終了後

の調査では、授業を受けての学び・感想について質問し、実習終了後の調査では、VS測定の授業における学習が実習で役立ったか否かについて質問した。

「授業が実習で役立ったか」の質問については4段階評定とし、その他は自由記述により回答を求めた。

5. 分析方法

「授業が実習で役立ったか」の質問については各選択肢の割合を算出した。

自由記述に関する分析は、質的記述的方法を用いて行った。記述を要約したものをコードとし、意味内容の類似する項目毎に分類したものをサブカテゴリーを作成し、さらに抽象化してカテゴリーとした。分析に際しては、基礎看護学を専門とする研究者のスーパーバイズを受け、信頼性と妥当性の確保に努めた。

6. 倫理的配慮

本研究の目的、意義、調査方法についての説明および調査への協力は自由意志であり、協力しないことで不利益を被ることはなく、成績評価とも一切関係ないこと、途中で協力を辞退できること、個人が特定されることはないこと、得られたデータは厳重に管理し、研究終了後には消去・破棄すること、研究成果は学会発表・研究論文として公表すること、アンケート用紙の提出をもって研究協力への同意を得られたものとするについて対象者に口頭と文面で説明し、承諾を得た。

結果

質的記述的分析の結果においては、カテゴリーを【 】で示す。

1. 授業終了後アンケート（1回目）結果

対象となる看護学生57名に依頼し、35名からの回答を得た。回収率は61.4%であった。

1) VS測定の授業を受けての感想

（1）授業を受けて良かったこと・学んだこと

25コード、12サブカテゴリーから、5カテゴリーが抽出された。結果を表1-1に示す。

学生は授業により【根拠に基づいた正確な測定方法を習得】し、【練習を通して測定技術が上達】していた。技術練習を繰り返す中で【測定値の個人差や変動を実感】し、【実践に向けた心理的レディネスを獲得】できていた。また、本授業については【実習を見据えた授業展開が効果的】であったと評価していた。

（2）授業を受けて良くなかったこと・難しかったこと

16コード、6サブカテゴリーから、3カテゴリーが抽出された。結果を表1-2に示す。

学生は特に【血圧測定の技の習得に難渋】し、【測定時に個人差を痛感】していた。技術の確認では、【プレッシャーにより冷静な測定が困難】であると感じていた。

表1-1 授業を受けて良かったこと・学んだこと

カテゴリー	サブカテゴリー
根拠に基づいた正確な測定方法を習得	原理原則に沿った測定方法を理解
	測定方法への興味により学習意欲が向上
練習を通して測定技術が上達	バイタルサインズ測定の根拠を学習
	円滑な測定手技を習得
測定値の個人差や変動を実感	解剖学的根拠を測定技術に活用
	測定を通して患者の体調変化を体験
実践に向けた心理的レディネスを獲得	測定値の個人差を認知
	測定の正確さを求められた際に伴う緊張を体感
	患者に対する配慮の必要性を理解
実習を見据えた授業展開が効果的	実習での看護技術に対する自信の獲得
	実習に向けて技術練習を実施できる授業
	実習での実践における留意点を理解
	事例を対象とした技術確認が実習のイメージ化に貢献

表1-2 授業を受けて良くなかったこと・難しかったこと

カテゴリー	サブカテゴリー
血圧測定の技の習得に難渋	困難な血圧測定の手技
	教員指導時間が不足
測定時に個人差を痛感	複数の学生相手での練習不足
	対象により聴診の難易度に差異
プレッシャーにより冷静な測定が困難	失敗の許されない技術評価に疲労
	緊張で平常心を保つことに困苦

2. 実習終了後アンケート（2回目）結果

対象となる看護学生57名に依頼し、56名からの回答を得た。回収率は98.2%であった。

1) VS測定の授業が実習で役立ったか

『①とても役に立った』が66%、『②役に立った』が34%と、全回答が肯定的な評価であった。

2) VS測定の授業の実習における効果

（1）授業における学習の中で実習に役立ったこと

65コード、19サブカテゴリーから、6カテゴリーが抽出された。結果を表2-1に示す。

学生は授業を通して、【VS測定に関する基礎的知識を修得】した上で、【技術習得を目指した反復練習】を行い、【確実な測定技術を習得】できたことが実習で役立ったと感じていた。心理面においても【冷静に実施できる精神力を獲得】でき、【患者とのコミュニケーションに向けた準備】が事前に行えたことも役立っていた。さらに、具体的かつ実践的に【VS測定の一連の流れをイメージ化】できたことも効果的であったと感じていた。

（2）授業と違い困ったこと・上手くいかなかったこと

62コード、22サブカテゴリーから、6カテゴリーが抽出された。結果を表2-2に示す。

学生は初めての病棟・病室において、【実習室と病室の物理的環境の差異に困惑】していた。VS測定では、【加齢による身体的変化が測定に及ぼす影響に苦慮】し、【患者とのコミュニケーション不足により円滑な測定が困難】となっていた。また、計画通りには進まない経

験から、【患者個々に合わせた臨機応変な対応の意義を痛感】していた。実習ではV S測定以外の観察も必要であり、【臨床に必要な知識・技術の未熟さを認識】していた。心理面では【過度の緊張による失態に遺憾】の意がみられた。

表2-1 授業における学習の中で実習に役立ったこと

カテゴリー	サブカテゴリー
バイタルサインズ測定に関する基礎的知識を修得	測定における根拠を理解
	原理原則に沿った測定方法を理解
	測定時の留意点を理解
	個別性を踏まえた測定の意義を理解
技術習得を目指した反復練習	測定技術を繰り返し練習
	練習を積み重ねることによる成長を実感
確実な測定技術を習得	測定手順を体得
	スムーズに実施できる技能を獲得
	測定技術の正確性が向上
	患者への負担が減少
冷静に実施できる精神力を獲得	測定技術への自信を獲得
	測定に対する不安が軽減
	測定時の緊張が緩和
	戸惑いなく実践に適應
看護援助としての一連の流れをイメージ化	全体を通した流れを把握
	測定と同時に情報を得ることの意義を理解
	測定時の効率性を認識
患者とのコミュニケーションに向けた準備	患者への声かけを練習
	患者の理解度に合わせた説明に留意
	根拠の説明に備えて心構え

表2-2 授業と違い困ったこと・上手くいかなかったこと

カテゴリー	サブカテゴリー
実習室と病室の物理的環境の差異に困惑	狭い病室では作業域の確保が困難
	病室でのボディメカニクスの活用が困難
	病棟内の環境音が測定を妨害
	基本的手順による血圧測定に必要な物品が不足
	長袖病衣着用患者の測定に難渋
加齢による身体的変化が測定に及ぼす影響に苦慮	高齢者の脈拍触知に難航
	高齢者に対するマンシェットの巻き加減が不確実
	看護学生と高齢者の皮膚の差異を体感
	患者の負担を最小限にする必要性を再認識
患者個々に合わせた臨機応変な対応の意義を痛感	高血圧患者の血圧測定に困却
	座位での呼吸測定に難渋
	感染予防策への意識不足
	患者の状態に応じて測定順を変更
	測定値の異常を認めた際の対応に狼狽
患者とのコミュニケーション不足により円滑な測定が困難	患者の理解力に合わせた説明に難渋
	原理原則に沿った脈拍・呼吸測定で患者が杞憂
	脈拍・呼吸測定中の患者の言行に困苦
臨床に必要な知識・技術の未熟さを認識	腸蠕動音・呼吸音の聴診技術が未習得
	観察項目に関する知識が欠如
過度の緊張による失態に遺憾	初めての測定に緊張
	緊張から測定を失敗
	緊張により言動が生硬

考察

実習で有効であった授業での学習や経験としては、基礎的な知識や確実な測定技術を身につけられたことが

挙げられていた。これは、技術習得を目指して反復練習を行った成果の表れである。V S測定は学内演習によって習得が可能となる技術であり²⁾、血圧測定などの手先を動かし実施する能力は回数を経験することで習得可能な要素である³⁾ことから、学生が目的意識を持ち、自分の技術を振り返りながら反復練習を行う機会を設けたことは効果的であったと評価できる。また、授業を通して、実習で冷静に実施できる精神力を獲得できていた。学生が抱く初回実習前の不安や緊張の原因には、V S測定を含めた看護技術の提供、患者像のイメージがつかず漠然としていること、初回であること、患者とのコミュニケーション、教員からの評価などがある^{4)~8)}とされており、本学においても授業前には多くの学生が不安や緊張・ストレスなどを抱いていた。こうした心理的問題を軽減させるための方法として、事例を用いた学内演習の有効性が明らかとなっている^{9)~11)}。本授業においても、事例患者の年齢、疾患、全身状態、日常生活自立度などの情報をもとに、個別性に合わせた安全・安楽な看護援助を実施する、という実践的な経験が、学生にとって実習に対する不安や緊張を軽減するとともに自信を高めることに有効であったと考えられる。

さらに、V S測定の一連の流れをイメージ化することもできていた。これは本授業で意図していたことであり、事例を用いた演習は患者への技術提供のイメージ作りに効果的である¹²⁾との報告と同様の成果が得られた。実習で患者と向き合い、援助する自己像をイメージできたことは、実習に臨む上での不安を軽減するための一助となったと考えられる。

しかしその一方で、病室が患者にとって生活の場であることによる学内実習室と実習施設の物理的環境の差異、若い学生とは違う加齢による身体的変化のある患者への測定、患者の病態や日々変化する体調、理解度などの個別性に合わせた迅速な対応などについて、授業とは違い困難なことであると感じていた。同様の結果は多くの先行研究により報告されている^{6)~9), 11), 13)~15)}。当然ながら、学内演習と臨地実習では環境も対象も違い、同一状況のもとで繰り返すロールプレイングでは臨機応変さは学習できない¹³⁾、学内で患者の状態に応じた個別性のある看護ケアを習得するには限界があり、個別性は実習でのみ習得できること¹⁵⁾とも言われている。本授業では学生同士でシナリオに沿って練習しており、事例患者に対する援助の一連の流れや個別的な援助方法は意識できても、実習での多様な患者への臨機応変な対応や環境の違いを学ぶには限界があったと考えられる。

基礎看護学実習において指導にあたる者は、学生が初めての実習で困難を感じやすい場面に留意しながら、学内演習から実習へと継続的・段階的に学びを深めていけるよう、教授方法を工夫していくことが必要である。

結論

実習前のV S測定の授業が基礎看護学実習に与える効果を調査した結果、以下のことが明らかとなった。

1. 学生は、授業を通して得た基礎的な知識、確実な測定技術、冷静に実施できる精神力、測定時の患者とのコミュニケーションに対する準備が役に立ったと感じていた。また、事例患者を用いた看護援助の経験や、看護援助としての一連の流れのイメージ化が効果的であったと感じていた。
2. 学生は、学内演習環境と臨地実習の物理的環境の差異、患者の加齢による身体的変化が測定に及ぼす影響、患者個々に合わせた臨機応変な対応に困難を感じていた。また、実践を通して自己の知識・技術の未熟さを実感していた。

文献

- 1) 文部科学省高等教育局医学教育課：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告。2014-11-13（入手日）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf
- 2) 市川恭子, 佐久間佐織, 小澤香奈恵, 竹下美恵子：基礎看護実習Ⅱにおける看護技術実践の自信度と技術テストの関連性。愛知きわみ看護短期大学紀要, 8, 93-99, 2012.
- 3) 船木由香：基礎看護学実習における血圧測定技術の構成要素およびその習得状況の経時的変化の検討。日本保健医療行動科学会年報, 26, 130-141, 2011.
- 4) 近藤奈緒子, 杉山恵子, 佐藤和子：初回臨地実習前に学生が捉えている患者とのコミュニケーションと実習前に抱く不安。基礎看護学実習Ⅰ前のアンケート調査から。神奈川県立よこはま看護専門学校紀要, 4, 7-11, 2008.
- 5) 近藤邦, 松浦真理子, 後藤佳子, 後藤隆之：看護学生が実習前に感じる不安に関する研究。基礎看護実習と領域別実習との比較。三育学院短期大学紀要, 34, 11-25, 2006.
- 6) 富澤美幸：臨地実習において初めての血圧測定に学生が困難と感じる要因。足利短期大学研究紀要, 28, 85-89, 2008.
- 7) 佐藤まゆみ, 早坂直子, 古川千晶, 小嶋希, 畑涼子：臨地実習で学生が感じる水銀血圧計を用いての血圧測定の難しさ。基礎看護学実習Ⅱを終えた2年生に調査して。日本看護学会論文集。看護教育, 37, 206-208, 2006.
- 8) 目時まゆみ, 佐藤和子：基礎看護学実習Ⅱにおける学生の困難感。神奈川県立よこはま看護専門学校紀要, 4, 1-6, 2008.
- 9) 佐藤美紀, 大津廣子, 籠玲子, 川島良子, 小松万喜子, 曾田陽子, 西尾亜理砂：基礎看護学実習前の技術学習方法の検討。愛知県立大学看護学部紀要, 18, 83-90, 2012.
- 10) 籠玲子, 佐藤美紀, 大津廣子, 川島良子, 小松万喜子, 曾田陽子, 西尾亜理砂, 長野きよみ：事前学習の取り組みによる基礎看護学実習前の看護学生の不安の変化。愛知県立大学看護学部紀要, 19, 61-66, 2013.
- 11) 竹見八代子：基礎看護学実習Ⅱ実習前の学内演習の効果について。インターナショナル Nursing Care Research, 12(4), 145-150, 2013.
- 12) 遠藤美穂子, 南美千子：具体的事例提示による看護学生の基礎看護技術学内演習の効果。三友堂病院医学雑誌, 12(1), 67-70, 2011.
- 13) 山下和子, 川元美津子：基礎看護技術におけるロールプレイング学習の効果。学生アンケートの結果から。日本看護学会論文集。看護教育, 36, 18-20, 2005.
- 14) 青木光子, 岡田ルリ子, 関谷由香里, 徳永なみじ, 相原ひろみ, 和田由香里, 野本百合子：基礎看護学実習における看護技術実施時の学生の困難と対処方法。愛媛県立医療技術大学紀要, 5(1), 57-64, 2008.
- 15) 佐藤晶子, 馬醫世志子, 城生弘美：基礎看護学実習において学生が経験する看護基本技術についての研究。「環境調整技術」と「バイタルサイン測定」。群馬パース大学紀要, (6), 71-79, 2008.